本朝文鑑　二之三

911.3
ホ
2の3

本朝文鑑第二

賦類

硯賦　既望賦　涼賦　将棊賦

讀将棊賦　日和山賦　悠然賦　好色賦

行類

水波行　万歳行

吟類

雨夜吟

曲類

都曲　田舎曲　東曲　舞子曲

賦類

硯賦

北枝子吟

物をもてあそひて其志を失ふはいにしへの人のいましめ
なかしかれも文房のそしかよなれはやさしきに
あるへしたゝあつまの手れあしさらの端る素れ
そしやすきその静なる和に合なしとうちなるも
いとのしらなうめや波之これの深れくなるはたしも墨
まうまうまてゆきつゝしなし何もふくみむらひ悦人
まれなえそひともかへふなし文月のにの手向まよき
硫の下気とかまねて物てはむしのおさむのそこ露

の中ともうけしてむけらそひしそのえとめらりい人の世の
体まのめからとときつかせる雲とあつむる雲のかくこなりと
なうらく涼ふ起なし時なる金よかれて京都よ
たゝへくもあくぬよ世川こも起されて時にかな雑
たのうへつくもちられてをむらしあわうえ流らかくれもれ
うらり物色のまそさあててあくねへきかくておそきみる嘆
のれらよ秋おしもつよまりてけらくとへいひくしよ
あらすまれなる世よ中らへ多へての人なしかくやうの
なもふひぬへされのそくひあやしてなる中よ狩てくんを
すむもてもひく人然あらとい酒も然とるたると

ことふみとさうも有ほかし月とうんれハ心たくしよ
ひとかけちりやまし白安の風姿ともてされハ峠もいろそこ
錦なるらん王中の道途ふへきにいるちもおさかし
うしはゝハ錦のむかしあはいかて玄おゐる文ふよ
ゑうしむへていやよめて石よ人もうるはしとそよ

紀云此賦ハ文章ノ盡言ヲ尽シテ始ニハ子西カ詩ノ上ヨリ此八萬雲ノ文字ヲ云イ終ハ石ト人ノ二字ヲ云イテ全篇硯ノ二字ヲ顕ハサス此筆ヲ隠見ノ格ニシテ倭文ニ一体ノ奇絶ト称スヘシ然ルニ壁上ノ印ヲモトモ云ヘル前後ノ通續ヲ辨（ハキマ）ヘ人但シ源氏ニ玉鬘ノ姿ヲ云ヘルニヤ知ラス去レハ此老ハ此村氏ニシテ其学ニ於テ学ノ名ヲ称シテ始ハ洛ノ新玉津嶋ニ住シ後ハ五禄ヲ得テ武城ニ学仕ス歌書ノ秘物モ数多ナリトゾ

既望（イサヨヒ）ノ賦

芭蕉庵

望月の残興なをやまず二三子いさめられて舩をかた田の浦にはす其日申の時はかりになにかし茂兵衛成秀といふ人の家のうしろにいたる酔翁狂客月にうかれて来れりと舩の中よりうたふあるしおもひかけすよろこひて簾をまき塵をはらふ園ニ

岸ありけくきとありて野鮒の如月さへさわかすあるは沈
やみて岸上に擲となりて遙との思ひをせしむいさ宵
の景と称して月ちやは川にむれしもふくれしいて湖上
にふやうに照りされり兼てこそ仲秋の月の
月の清えきまにはし山ふと鏡山とふたつよし
今やねあそびのあそ遙ろトと堂上の欄干に
それに三上水茎をたちてこれて其のつらに十二降
の気色とひとさしてとかくうふなし月に三年にして
思ものうちにかくれきれいつどら横山とてふるを
こうして隠れしあるし此奥とみえて何くしきのかかち

それより宮とりて念ろに涌しいて如何やそれに此月
のころとてふらしたりし水面に玉塔の気とくまで
あしたより瀬卿の光とみるる陣やいさよひの花ら
とせのまにうけてかうとなく月のおしさのくしかちとと
うちに在さつの歎息の洞なりと詠たまひしも
げにさまあそひて二もらひ恵ん修行の衣とらるれて
世常寂光の浄なしてやさいふにあるは奥なる深
てまれり言をなして隠ちて奥にふゆてなくしてゆりの
岸上に石をあゝれば月ちて横川にかくろふに打擬
峰の鏡もかすかなるへ──

任云此賦ハ誠ニ劉亮ニシテ全ク賦体ヲ合セリトス又一ハ
鏡山ノ一節ヨリ古今ニ六月ノ雲ヲ寄セテ此一首ニ序草
主振ヲ云イ古詩ニハ玉塔ノ喩ヘヲ借テ千射仏ノ色ヲ添フ
むモ故事古語ノ用イ所ハ此筆ノ擒抹ニ執ヘキヨリ来ヨリ
先翁ノ文章ハ獅子庵ノ遺稿ニモ数多ナレバ或ハ湖東
ノ文選ニ入リ或ハ門下ノ俳文集ニ出テ今ヤ再選スルニ
及ハズ辟書ヘ両三篇ヲ見尽セズトモ此一篇ノ趣意ヲ見テ此一篇
ノ虚実ヲ知ラハ和哥ノ道ニ云モ更ニ明カニ俳諧ノ修擇モ
更ニ明ナラン云ルハ黄門ノ詞ニスカリテ歓楽ノ中ノ哀情
ヲ云ルハ例ニ楽ニシテ淫セズトヤ斯云羽ニ於テ斯文アラン

涼賦

渡吾仲

洛陽の東に川ありて上をかも川といひ下をしら川
とふる是ならぬ世の石川や瀬の小川とも不知に
されハ年ことの六月七日より十八日の程ハ東西の家
の桟の二条より五条の橋とかぎりてそめの川
なる床をならべ涼の間にて人の所とそ云
むしろのむしろに青翠の風と涼しぶ中にして五月
とむとなりとかしするこそ世俗の風流とあれて
生じ付るとらちりし淡やことやこ人の綿織とかきら

詠るの者は凡て知らん。されど一まハ此のうへあるにそ
清水西の岸よりのぼりてみやこの桃灯とめし
をみるに海くのゑとをりやうたわら竹馬くろはてある
れ。雲林院愛宕の、それさしも夜を一方の、れいにはひそ
扉をたゝき、竹林にかくし、風も柳原の深しばかりの
やとりの雨にもかしこしは色の色にそめていむにたにも
や門前の松を染られて芝居のあるし祇園のあるし
まて万燈のひかりに白日ともあらはれ、沈香火底の
黄楼とも呼つべし。誠にもはなはだしの声、物けあるへ
いかなるも此面白さあらむ。寒の暦・坊のあはれに

西よ神明をも志てはるしはてよくの河原おもてにきく
餅あり、酒ありあるい茶屋ありて揉(ヤハヤハ)は蛸の蛸に
かくし、ここに坊の比戯人ありなひき、石花菜(トコロテン)の流れは
清くと八十杯の茶門にゆゆる人もおもふ所あり
比丘衆とよばれは、味も五分の色の芝居をよそに
辻談義あり、放下師あり、声々女中とおもしろ
あそぶは漁人ともまたはすすしむありて水右衛投(ナゲ)
猿猴のまねをみせしめるもの滅多的に王(カヽ)月と
ゆさく、辻に字辣の来とはへ、檜の倉の井と丼と
くく歌かくらの地獄極楽もみな一様に善悪を

只これに一刻千金のあたひの中より中を撰いふにおよ
むかしを今のおもかげしきをも儒に作の娯からをしらん
名利の間にいと忍さらや生死の迷ひより出とされ
きるや作れとれよりのことよりの中よりもからおのれ遊よ
あらむ言予序の作ともかそれに記ハ高佳部の
あらむ乎よむろとてとかくもとりむれあたらかなし
任云世態ハ縦擒無碍ニシテ始ハ王城ノ万代ヲ祝シ中ニハ
帝京ノ花美ヲ顕ハシテ終リニ遊人ノ哀楽ヲ云ヘル誠ニ長安ノ
名利ヲ観シテ然モ長安ノ名利ニ遊ヘリ或ハ四時風景
ニ和云ノ文法ヲ交ヘタル或ハ家名ノ挑灯ニ浮世草紙ノ

筆格ヲ用イタル或ハ河原ノ貴物ニ長短ノ對ノ賦体ヲ尽
セル總テハ俳諧ノ筆格ヨリ新古ノ風ヲ合成セリト云ヘシ
況ヤ儒仏ノ高論ヲ挙ケテ其ハヒガ俗語ノ軽忽ナル文
文章ノ無盡無外ヲ傳ヘテ洛陽ニ無作者アリト称スヘシ但シ
世評ハ渡部氏ニノ別荘ヲ柳陰園ト云フ書ノ人ハ標写ハリトソ

将棊賦

東花坊

象戯とハ童蒙のあそびと去て...
とふなる張陣の法ありて盤上に智恵をとき
かうしむ國よの王の仁あるハなよ忠臣の義をふるひ

や勝負ハ時の運によるとて上手よりもよの将棋
なりしかるに馬組の法にならひたがひにかけひ
陣本将櫓にて金銀桂香と八ツにわけて飛車
と角行とハ軍師の位なり一しむしきを漢に張良
あり蜀に孔明あるかことくに諸軍をまもりて其の
下知によりてすゝみしりぞきなりされハ銀将以下の
諸卒はかりて敵の城中に飛入る時ハ王に一位と
なりて金将の位となるを将棊の勧賞として
なり此敵に歩兵ハ桶の羽となりてたえにましめて
諸将をまもりて敵陣と飛車に成る香車

とれも飛角ハうしろより桂馬とかけ組をなし訓練
によりて諸卒の旗下の勇士として之にはりて飛車を
居に飛車あり又角あり中にも飛車ハ左法の軍
となれハ中央に銀角のそなへにはかりても二方に
一兵の損あり兵書に言る逸労の法ありてこれは
なくハ此の歩と将とよりて或ハ中・段に飛車
のあるかりしこによりて歩をまもるとつき其の軍に
空象を横に角に至れと路をそろへにしてもまたハ銀
桂に居と飛べきれていかくもとよりも度とつきなり
それと飛車のもの輔とするなりて敵ハ桶の羽を知て

若一は味方は大将を討せしと馬の足もとのまもりてゆかん
不退の敵軍に乃ふすまありけりとやよ鶴のうらは飛
亂のきはよりまつさきしかる兵書の誠も実に金一
けれどもあれ敵は深入して王のかたはらとゆふむけなれは
かつらうち桂馬とくれなゐより銀とたけ撫はら
金とうち捨て香車の陣に責きそれは鉄壁
も囲をくしはやく逃くそと飛王の一手に押とつひて
飛車の歩の軍術なりけれども歩の子北香車は沖
さて彼はさまでは角道されてあへなく命をともふ
すも侍らて死ゐ将の名にやさいて小冠者にも妹肩

とられてまきぞんぜむかしかへらぬ成歩歌成歩かつて
寔に敵ととりてはあるまじくけるものいひやけれ角行は
拙の陣にひえてよ聖の手の勝と定むくされのなれば
ちる囲にいる馬也に香車をに勇をかくしおかく
は金銀とは也に飛車のきはに命とおもひきる死ね
の勇気とめぐらふよりかの沖達は早道におそれ川へ
或る飛び王に神妙とやすかれかの擒はうち落れ
けに敵をもつめるを行く来ふんと王将の所はあへの手ども
行て銀をとあらし棒をそのれはとめつらし鶴羽音の
遠角をわたしといひもおのに王は飛車はとかきて

此よの勝とおもふ事ハなく角の上の秘法ありて
王死とちて一とまかせてしへしはり軍のなかひ
にて勝に弱きもありあやうきとやさしき孝の
口訣あり王ト飛車とにかくれ角行し請ひされハ
角地の手余地の外とかくんとし連署記話の差論
にかれらかへる陣中の風俗として演舞の戦ひ
よさるたるしハ行りきとある時陣中におちあたる
てハなに角行とそろゝの心得に細えんハ作りの軍師
にきつしきとはしやくにやうて官人の時ハ龍馬やし
あのりて四方八面に威風をかゝへとも人のおもて

角行は角ゆくといふとも右の如し法て金将ハ
王将とあれとて常にそのかはりて続けて諸事
の重宝とはしもりりのやまく飛角かふやを
かくおりあれハ銀将のまもりに陣とはしあれ
ともも首きく深みやまれにくつし絶対の勝負
とこのやまて在ふ了銀将の下知をなしてやれくと
いふらに桂らくハ桂馬歩の本をしとやみれかくる
に一まもおはすあるて或を桂馬におひされて中段に
もしひおうに歩兵の馬をもてくれる時ハからここの
よるそによるれて世をなし敵のまよりうら兵をく

よのつねの兵糧をはこびてその身はいかさまにもあれ
さるに銀将を歩兵となしてはひ、本より陣のなか
とかくのあたりあやうかれ隠大将とみへし桂ハ馬ーにおもむ
飛車のうらとなりて敵とねらひて我が身と二の軍
たの手にとやかくとしてふせぐなるしむかし朝鮮なる
首にも濡(ミつヤ)王田とふ朝(テウ)りも此飛の行さきにて及さらん
行をとて金も飛車に十勝(ひ)とくてつきて行にまつりと
とりてさるよしみにも理むてゐ無所をしてふるまいし
行るを韓信がやさしくとらをとりてて大将のなをあをと
ちるまで行く末へしるを信をく足軽(アシガル)の法とくいひて

銀将が歩の軍器なれバ彼が奥砂のちからもちたる
のかくれ行る備なるにしをれど敵王にむかひきたると
かゝるを行くさきふ敵をたて其の腹とくて立をさえるはゐを
さるはを取一所にあひなりて金将一枚もおさふる
根くる官桂のひくれてとくけてなる身のちからとなり
又物されしとまつり金将の勢と然としてはけなさ色
といはれる者もしくは挿馬とならもおかしき者なれ
ましむ但し地の者も飛かて危きにみてを立てゐるそく
まあるは行るゝ猪の勇気より似て臭のさかつける
ほまおかしくらし、張儀蘇秦が辯舌と

すて敵国とたゝかふ時のひきと霰ひて不善を討んと
をこれを仁者の作法とす是れてそやうさうる事ハ飛車
とつふはもあるは王将の将軍又高塀を離して
さし取るゝと騒将をひきて歩兵を禁へにしやおて
彼か衆をとはらぬさとされハえろくし不痛はとおひ
あらしね悔をきるまことしくふりてとハ桂馬のるあれ
といひて世智又かしこくとよふてそれと桂馬のはら
諸とてひ又を桂馬のそふし諸とてふハ彼か弟の重の
よりて敵の田地を元銀へいそきよう陣笑の軍な
このきるまあり香車を角数の小姓と云ふものは

すゝめてかまはぬるをなさしむるハ其の軍又一に称して
其の面目とすへしむとするなるめりをもちひ一命に及
ばれて素鑓（スヤリ）を彼か家の一法なりと云ふと一陣に
すゝむは歩兵の業用とあらそへりとて鉄炮を
そなへられハこれをもちひてかへさしかへらし抑をとし
ければ悔を子孫のてうりをも子へしかくて両陣
両王又対して始をとき（キフ）其の一にまちまてしかし先
あれはおもはれくまも先あらて守りをこにまさ之は
遠をあるをひ孫を一にまさ遠又勝負を決する皆をし
先進先退の兵法にして上にまとめ何さんおよそ

ことはたゞ河を用ふることを論ずる所は兵家の奥義を
もちて令を静むるとさるゝものは楯わとてへ
あられて居るはなきこれらのみにあらずと論じてして
諸葛孔明は八陣圖をもつて神謀妙策の謀を
めぐらし宗桂の家には将棊経と伝へて其戦術
将の法とあつまりて畢竟は油断大敵のいましめ
儒師なるを説きつゞけて四十八手のうちにもあり
八十一目の将棊とまふされば孔子もまた博奕といましめて
象戯ではなしとも云へる諸説や盤上のあそびを
とへてはその角のまゝ勝をもとへるとしてそのうちに利
戯とも云ふべしされはこの河にそのみを此所とえらひて
人をして對盤の法をまなばしむるならんや

讀二将棊賦一

村野航

将棊は一軸の巻物あり開けば方寸の天にあそび
下は龍王の髭にもさかのぼり握れば一尺の盤上にかへりて
飛馬の騎に風をおこし縦横自在にこれを行ふ
物におよぶ事をこゝろの外と節して和漢の情を
はしるもこれを宿すは蝸牛の角の国と
あらそひてかつときは敵をふりむけあるは大将の

剛愎なるに陳余の軍とありしは軍師のた勇なるに章邯の
詔(みことのり)をうけてさるへ趙国のなりしもかなひて下
て上をたをしるより庶車の氏をすてて中啓にわれあれ
なき畑の左輔つしむ若い角りのひくきのみ出さく行く
やみて項楚の風流を張良か譏(そし)るあり一次に全将戦将
と関羽張飛か異見なるもあしくて武綱は平か力味あらもあく
て金に宗盛の憶病とおもしへに雑兵のよりに栄耀の
むかしり銀に韓信か勇気ととをしまれは諸子の頭
に武衛の名をいふてこれをしも官禄をなかえからん
の今もむかしの人はいかりしかなるやはて抹香か様

なりしに孫馬と張飛か辨ありて堀と趙とは駒はくさら
さるを軍よりは抹香と此賊の名言なりん或ハ逸言か此
地ノしきしき以逸待労(いつをもつてらうをまつ)とは兵書なる人の退屈をする
によりて葉の戯言(たはこと)によりなりしくらう或は前行の言事なる
と貞観の二字よ文章とさつめさる或は孫とまりて
力のあるとかゝる人とあさむあて實のほどこはなれ
ゝるさ愈てもは今はの世情と写して儒仏の書と
見よみより御家の八教と指よりるぞ術に将棋よ
此喩ありて和漢の情とこゝてつかをもてへ入は了之盤上の
あはれひとつんて人はまゝ戯ともなるつて又あはれ是帝は前に

しられとくつへ孔子も世の人にえらとをりくせしけりな宝殿
ゝ刻腫の人々膝行して出來ると消いされいかしてむね寄せ
般遮の族ら頁をて念佛とかけらんやはさしね其お
るべ冷前とゐくけぬね葉をとしるいまるとけくふ
きても世らいさく妻之兵のけしやすり名人號の咄かて
駒よやーね身情とかあれい師よ五子羞の程とけく
とる遠く大般若の其碑とをうれんくれ近く亦侍葉
の此跡と……む庵し

往云此篇ハ前賦ノ詳ナヤラ委ク啟良古諺ヲ解スルニ
文ニハ句對アリ意對アリテ類ニ賦体ヲ成セリ謝ニ

應用自在ト云ニし来ルハ殊刑ムカ傳類ヨリ寄ニモ謂ハ子
ヲ顕セリ然レハ此篇ノ趣ハ始ニ羞ヲ飾ノ二字ヲ以テ和漢ニ
百般ノ情ヲ喩ヘ儒仏ニ一貫ノ理ヲ述ヘ或ハ雷公記リ风
輕レトハ孟父カ臥竜ノ楚見ヲ撝シ杜陵カ胡馬ノ詩ヲ採レリ
或ハ保元章武トハ和ニ信頼ノ敗軍ヲ云ヘ漢ニ孔明カ出
師ヲ云フル但シ先帝崩御ノ年号ナラン或ハ関羽ノ一對ニハ
和漢ニ智勇ノ無士ヲ云イナヒラ思ヲ見トカ味トハ互見ノ法
ニシテ犹モ最略ヲ二冊タルナリ婚レテ家成四ニ韓信トハ
金銀ノ情ヲ喬同ミシテ文章ノ风情ハ為ニ知ルへし或ハ寺孔
ノ一對ニ其レヲ敎ヘトハ其名ヲ云イテ是ヲ為トハ特其來ヲ云

ヘルモ隠見ノ法ナカラ甚シ是ハ二字ニ云イナヘテ此等ハ奇絶ト称スヘシ然ルニ結語ノ大般若ハ将集中侍其ナトニ云フヨリ摩訶大ノ二字ニ帰着ストナル此等ハ當意即妙トモ云ハン但シ野航ハ加々美氏ナルカ別姓ハ村瀬ニシテ濃ノ山縣ニ住ス董二房ト称ス才ナリ

日和山賦

山岸眠良

湊には松山と名にしや庵に風雨の霽をとえて眠雲てらゝあんともおもへハ此浜の日和山ハおもて国川と帯として五反田を襟として蒼海をよ仍のにく

よにあり一白千ち一日室の遠をしとえる処れハ盃山のかまちありて浜にあらさるへし浜にあらさるへし林麓に松の木立より市店の向峰にわたりて帝に金風寺て開静(カイセイ)の鬣石をひきし北に月宮寺に入道の鏡をとこく西施の葉も浙谷の観音も多くの様を会あつまりて松杉に南の傍もこひやう一し況や東北ハおさくく西南に海くるゝあり白根の雪に一ねておもしろく新羅(しらき)の月ハ千里にきつむとさし眠雲のおもしろさ一むへしおなはかに此らにあなひて鵯(ヒヨトリ)の日和をまちてさてくたのしら涼気子にも氣にたちて鵙(モズ)の松風と秋ふかて

近江路に行くりあとは浜のみん山を風雅の人とや何よ
いふあるは入日の夕をまかへやぶあるおいてもふねの
島風に浮かぶ山に飢渇のえにあまたあつし淀に来船の
俵とかさんはかりあり誰の世にいまかしふるさとのいとまの
のりのこころもおかし安治の海膽も尼浦の栄螺も
長橋の艘は上三の月とかはらし島屋の鮭は下臈
のにまつ吹けて灌頂寺の松あらは昔の軍は比叡ありはなり
加茂の路の辨天とかつ世の福とあらず稲荷の少し
橋立の所にて雄鳴は神のかこも色好みて船は梶から
は秋田の月は和とつの歌によし松嶋の風景と

さてまして市金の所に櫚に夕陽と見ゆらんと室津の
煙は浪にの浦までぬかましひて風光まことにあはれなる泊
されを此津の遊女とも此明鏡の香をまろね男鹿の
笛にまろてありくはなにあやかりのその人と見
おくりて使枕の酒とさもひ入ふねの客を待まで
言通船の音にあくるひ泊まるんけふかき暮
の情あはれなるをまつとあくえぶあて
おのれはこの本ならん此嘆息とよれて持る毛頸の
遊女とともに扇に柔頸の風情をほのさて流し
三弄の池とあそふいて世の中の風をもそれらの人と

いさゝかわるゝかたんはれと船江のうらあそと見て言よ風雨
の言池とそこうひまし秋のはれとはるゝむへくハ天地に
人の和にはまつるとうつゝ哭賢の論もつゝるゝやと
言ふはわが山の賦はくるてれく世ゝをはるゝもうるへし
狂云六篇ハ全ク賦体ニシテ文法殊ニ遠遠ナリ始ハ全勢半律
ノ二字ヨリ金風月窓ノ閑寂ナル白根ニ新羅ノ一對ハ筆ニ
天地ヲ縮ムト云ヘシ或ハ山海ノ名物ヲ賦シテ上戸ニ下戸ハ白搭
ノ自在ニシテ一捉ヒリ二毒ヨミハ文法ノ風流ナラン或ハ狩達女ノ一段
ニ胡蝶ニ男ノ扉ハ奇妙ニノ佗夜姫ニ衣通姫ハ時ヲ得タリト称
スヘシ然ルニ朝雲暮雨ノ四字ハ宋玉カ賦ノ神女ヲ借テ言ゝ

ハ山ノ寄ヒナルヲ長恨哥ノ情ヲ含ヒタル誠ニ情達自在ト
云ヘシ売ルヲ江ノ如言ノ嘆息ニ寄セテ文字ニ一篇ノ骨節ト
成セル本朝文粋ノ序類ニ見合スヘシ総テ此賦ノ趣ハ山ハ風雅
ノ人ヲ待ツト云ヨリ北山ノ移文ノ山霊ニ寄セテ北山風雲ノ楽慎ノ
ト云ヘル鍾山ノ英霊モ巫山ノ神女モ共ニ二文字ノ起結ニシテ
一篇ノ首尾モヲ見ルヘシ但シ作者ハ越ノ国ニ住ス山居名所ノ風土ナリ

悠然賦

鑑乙子

雪のおりしろふやりてやうて眠さるは世君庵にあつから
て俳のあたゝふまあり子とともによる跪くあれく

酒をのむといふ和をあつめ表は此あはれなる人とあはれとて
昨くつらし怨慾くるのし語るは世んとあはれにはらんや
作の事は昔の事をあつかふをうにはの昔は人の事とは
こゝにやうふる語るは此言をとあはれしんや此君なさの昔
といひをかの人といふあるしはイ事ら人とよけをとす
あらそひて酒を人とはかまくるのあらくはをしはに庵右
とまるにといあはれふ示のいちらひてかくる怨恨の酒は
も空れねは笑を酒ありて事あるんる彼らは此事は
あれはれらんといふは事此あるしたる人とまはれをとて
昨ふつくし怨恨くるのと

紀氏所謂賦ハ四五言詩ノ格ニシテ然モ文賦ノ劉賓客ヲ尽ロ其ハ也篇
ノ悠然ヨリ或ハ二子ノ両条ヲ用ヒ或ハ八子ノ其説ヲ用テ總テ
其ノ詞ヲ累(カサヌ)ルニ二子モ其用ヲ斯(カタ)ケズ此等ハ漢土ノ及サル
所ニシテ皇ニ和文ノ風格ヲ知ルベシ但シ此君庵ハ賀ノ金城ニ在リ
テノ駒万子ノ弟子ナリ此モ水竹ノ亀居ヲ然ルニ此名ヲ残シテ
ト八例ニ我師ノ隠君ナカヲ集(ヅ)ニ荘子ヲ読メル時ノ門題トソ

好色賦

無一好法師

つゝしみてゝしくをは色とのやはらんためとていとはらとも
こゝろゐの五のはとふはこゝろはをよへよあなむて

しほたれて所さだめずまどひありき親のいさめ世の
そしりをつゝむに心のいとまなくあふさきるさに
思ひみだれさるはひとりねがちにまどろむ夜なき
こそをかしけれさりとてひたすらたはれたるかた
にはあらで女にたやすからず思はれんこそあらまほ
しかるべきわざなれ

釈云此篇ハ世ニ知レル徒然艸ノ三段同ナリ然ルヲ宋玉カ賦
ニ效イテ今ノ此子ヲ題スルニ其趣ハ異ナリトモ其意ハ同キ
ナリ尤モ此段ハ甚キ書ノ関門ニテ古今ノ抄者モ爰ニ七顛
八倒スル事ハ学文者ノ如ヒニテ色ハ好ムニシキ経書ニ受テ

色ヲ好ムノ道理ヲ知ラス儒者ノ好色ヲ解セスヤト徒然ノ讃
ニモ此論アリ誠ヤ好色ヲ擇ブ子トスレハ磨言ヘシ千ノ宮ナラ
擇(エラブ)トモ姿モ情モ世ニ勝レ一生添ヘトモ飽ストニフ天下無
双ノ美人ハナキ故ニ無好ハ独寝ノ二字ヲ求メテ畢竟是ハ
無二妻ノ道理ヲ云ヘリ此故ニ登徒大夫ハ齗(ギン)唇ノ妻ヲ愛シ
五人ノ子ヲ産シ宋玉ハ靨(エクボ)輔ノ婦ヲ擇(エラ)ンテ独寝ノ男ナルニ
無好ノ云ヘル好色ハ宋玉カ云ヘル好色ニテ其趣ハ異ナレトモ
意ハ同シト註セルナリ疑モナク無好ハ文選ニ此賦ヲ写セル
ナラン誠ニ此段ノ異見ヲ知ラスハ二百余段ノ才モ三益无艸紙
ノ趣意モ明カニ無好ノ一生モ明カニ儒仏ノ教モ明ナル(ヘシ)

行類

水波行　孟亭

岸眠襄

三国の北一里ばかり大湊山の麓に瀧曲ありし所と
東尋坊とて名に世に知られし所は天正の比の人にて
僧の一字を求むる此悪徒なりし其性よからず果隠
て其の師とあるをも求めず其の徒とかたらひ華ぞ流ねと
業とそりは師をうらとくれたとうへ、こそひとなく
ころされすとはからる、ある日宴の果所よいざなひ
大きよ酔はしめて故よ岸より突落しけるなと
其れは彼が怨魂に此流曲よそかりてよく の卯月

五日ごとに風あらく波たちて西は小湊の方に流れかゝる坊
の霊といひて海に家ともに至るまで浦に此例あれ
おようて十尋の井ましと汲くさしく岩元十曲よ
うつまゐてんかるとも膝の酒をきこえさせてよしら
以の所なりんかなへし和尚の頌と伝へて此例を
なりとや思ひし又風波のいかにもなとやなさぬと
されば狩舎の風流もかよひて禅宗の風雅にあそぶ
身となり世一篇に法語とかへさるへから
むかし俗あり寛にまゐりて　卯月の法はみれいてゐりなん
一気の風ないにてまかり吹て　寛みる花がやまかりなん

諸の法師の法をもよかくれて　詠の美れいつくしはなさまん
海をわまれ其外もみろ分つ　聖の法をさくへとろもとん
此まやまさへいれて法あれて　法をとはとれへれともふへん
今うれむもて胸のみつられて　山ありくお法いいつちりへん
評云此行八十二句ニシテ詩三之韻一篇ノ格ナカラ總テウタフノ
一韻ニ六句ノテクニヨリ六句ノムクニヲ用ユ。夫ニ六一韻可ノ格ト
云ヘクテ倭文ニ体ノ鑑ナラン况ヤ此行ノ俳諧ニシテ卯花ノ雪
ニ啼鳥ノ古キヲ言ヘ青セ夫ニ文章ヲ頼ケル本ヨリ富饒ノ名ヲ
以テ恍惚ノ子ヲ云ヘルヤ然ヒハ此行ハ水波ノ二子ニ達ス故
ノ陣アレハ夫ニ此行ノ名トハナセリ誠ニ禅門ノ語脈アリテ正道ノ

ノ名語ヲ轉卻セリト云ヘシ

万歳行　五七言　　華表人

妊ハ君ハ五万歳々よ法作い見てよまちらんの（一同音語）
あし史の大和ふゆ君も法之下御かし。四季ふれい
みは来くよ風まあひあてとふひらせくあふ法を
て法しねいらやむいやの閑そうみを春し。鈴木をきたの方歳
さへ。やんしゝ春れをちかちて。（猿君詞）と上ねくろ扇さる石（左文詞）
春絶めけとぬ春のくゑぴむいしのふたれあそまいかの法のひつり（一同音節）
の吟か人へま（猿君詞）轉もゆ川祝ひて万歳来の服法し。中比（同音節）

さハ「あらうちハ。「柄杓もつりよはいつてくるや。めよくいとわるゝ君ら
御と云ひよはるとしてやされし。今の東をきゝてつゝに。
菓柄く こきくきら「柄よ風俗し「餅よ砂糖「ありかく
うらきる汁ゝめのまへ。実よ神名をねよほるゝ千歳ふく会
と祝ふ。「君えんきや「毎日よてる「赤ちまいついつれきそとおね。
ゆてよ年の汁ゝのかの豆をよれゝて柄からくらとけらしも
どれもひとふえの民のかまとにぎはやらせまし

往云此行ハ全篇ハ五章ニテ章毎ニハ句ナルヲ八句ニ三韻アル古六韻ハ
むモ四句ニ韻ニテ後ノ四句ニハ一韻アリ例ニ首尾ノ韻法ニノ本ヨリ
撫韻ノ一体ナリ云ルヲ才七五章ニハ九句アレ氏君不見ト八楽府ノ
俳諧ニシテ五行ノ韻ノ発語ナレハ和文ノ韻法ニモ五文ニチラ
除クニテ知ルヘシむもモ才ニ才五章ニモ語路ノ拍子ノ遠イ
タルハ杜甫カ麗人行ナトまず白カ襄陽ノ歌ニモ此長短ノ
句拍子アリテ是ヲ変文声ノ曲節ト云ヘリ此故ニ此行モ発語
ノ変文声ヲ詞トナセリ然レハ此行ニシテウキ往リテ節ト詞トノ差別
アル文ニ急緩ノ拍子ヲ知レトナリ但シ柄ニ凡ルヨリ君ハ又スマト
云フアタリハ両人左右ニ開キ合セテ此曲ヲ万歳ノ大夫才蔵ト云ヘリ
むモ親ト額ト見合スル時ノ形容ナラン總テハ漢文ノ舎韻語数ヲ
以テ万歳ト云イ治所ヲ万歳トミル此等ハ千鳥ヲ万歳ト云ハン
或ハ尾ヨリ尾ノ詞ヨリ承ノ二字ヲ云イ合ロメテ大和ニ君カハ千代ヲ

祝フ或ハ鶺鴒ニ照ノ字ハ照鴨ノ倒語ナリ或ハ逢坂ニ鶯鳥ハ鶴ノ
盧音ヲ含セテウヤムヤノ関ハ憂字ノ縁ナリ或ハ掛鳥ニハ
西行ノ哥ヲ借リ華袍ニハ東坡カ詩ヲ寄セテ例ニ和漢通用
ナリ去レハ東坡カ布穀ノ詩ニ勧我脱布袴トハ其鳥ノ鳴音
ナレハ是ニハ華袍トヱイ上タルナリ或ハ云京ノ名ヲ云ヘルハ御所
万歳ノ詞ニテ雅楽曲トハ酒ノ名ナリ然レハ聖俞カ四禽内語ニ
提壺蘆沽美酒ト啼ク鳥ハ日本ニ栩摺ノ類ナラン啼トハ
和哥ノ詞ニ寄セテ鳥ノ俗語ヲ願タル意ニ天章ノ二盧ニ宛タ
見ルヘシ或ハ団扇ニ柄トツケ百千鳥ハ囃物ノ拍子ニテ浜千鳥
ノ鼓カクナリ總テ万歳ノ詞ニハ八千代トツメルトノ二用ナラン或ハ京

タイラクトハ平安城ノ二字ヲ云イテ菊桐ハ當時ノ御紋ナルヲ示ノ
重都ノ字ヲ言ニ敘イテ意ニモ聖云ヘルナラン或ハ我朝ノ松ニ鶴トハ
平ノ一字ニハ洛陽ヲ祝シ松ノ二字ニハ武城ヲ祝シテ尤モ千歳ノ
亀ナリ或ハ千年ノ御祝トハ諸方歳ノ結語ニシヤラタノシトハ舞
収メヌルヲ今ハ主帝ノ御製ニ寄セテ家々ノ庭亀ヲ祝イタル誠ニ
同出奇万歳行ナルヘシ但シ華表人ハ我師ノ隠名ナトヲ文字奇怪
ヲ憚テ意ニハ丁寧カ鳥ヲ云ヘルナラン

吟類

雨ね吟

渋芦文

むらしれよ真のむねをとられて　思ふま袖をぬてをそねそてう

誰もまたかの稲つくふさ哉　拾ひてあはよ喜もらし。○
株を捨てゝ見舎なしねと　世とも輝の世をうちあゝそ△
主舎ねこ門へあつまるとて　人とうやむんちゝん△
物いやなきぬ我もろうさこ　乱おひかゝ添縫ね　と○
伴頭もかふる閑儀あなたを　忘れさらぬ浮世あさしと○
寒らさ来雨のおりわたりて　漏りてゆのく細相をやむ△
むかし夕陽ひなひとつけ　菜はあきふ人いうさんのて　ふ△
はては那のむれちりまく時て　やよはこれのかゝも添るな。○
すて見這のあはさし　捕もそゝるもえりあへ居ても。○
秋を秋とて推しの実哉　なれるあしねらねこみぬつれ△

秋風さても人やてうきむ　雲の海ぶくのはらふゝして△
はれし此面のいくもしねい　雪へ覚やとくまえし。○
はゞよ鶴のさしまうれい　はらうはつねいきりかえん。○
ふるやひまをを嵯て　樹下石上とつえてくるむ△
ましてちとせとれの本住よ　見えたりしぬれしそやある△
錦を月にもまとふ闇に　露ありし起り不破の関かな。○
昼へぬるときてあゝからん　むかしのをりは添をおもへる。○
但云此句ハ九章十八韻ニシテ章毎ニ四句押韻ナリ是杜陵カ
破屋ノ辞ヨリ衣食住ノ三ツ中ニ住居ニ四季ノ銀雑ヲ云リ
然レハ春秋ノ二字ヲ以テ夏冬ノ二各ヲ互照セシムミ四季ニ渉

ヲカケテ春秋ノ詞ヲ累(カサ)ヌル此等ハ隔句ノ言葉対シテ定ニ此ニ帰スニ當
法ヲ存スヘシ但シ茅屋(ヤヤ)ニ雪ヲ讀メル古人ノ詩等ヲ学フヘシ誠ニ
吟ノ一体ハ哀ノ声ニ喩ヘテノ自己ノ沉思ヲ云ナレハ杜陵ハ我ナリ寂寞
寒シキヲ歎キナシ又ハ我子ノ行末ヲ思ヘル閑守ハ起句ノ字ヲ見
喩ナルヘシ然ルニ仁破ノ月ヲ以テ隔句ニ云ナヲ全ナロル結語ハ題ヲ合
ノ夜ノ字ナナカラ沉吟ノ情ヲ完ニ尽シテ鳥窓ノ二子ノ無用ヲ知ラン
ニハ但シ作者ハ佐野氏ニテ美濃ノ関ニ逍遥ス蓮阿ノ名売ち

曲類

紅曲(フリ) 二章 作者不知

よしやともあらくつらへハくるれるてもしたそくさ

ふる月を
雲のとやまのあきちるのゆし　ゆやきあ濡の
うりの本し

往云此二章ハ古キ唱哥ナカラ今曲ノ文鑑ニ出セルナラ
二ハ前三章ハ古今集ノ寔アラキ月ヲトヒコソハ文字ノ花ナラ後三章ハ
新古今ノ花ノミニナレト漢ニハ牧牧カ詩情アリテ床敷(ユカシ)ト思ヒヤリ
又ハ此一章ノ寔ヨ所ニシテ茅店ノ鶏(トリ)ノ霜残覚ヘナランカ

田舎曲(フリ) 作者不知

市に出しらて身ろゆくり斜のまろかにてあへき

くふうさよ粋とよんでおきさし
こましみすのあらめくやしとあやまりきさこひよ
うれ俗世の子をててとりて

但云此三章ハ能登ノ國曲（クニブリ）ニテ總テ之趣路ノ間ニ訓謡ス淫ニ
下里巴人ノ類ナラン然レトモ樂府ノ古風ニ似テ山ニテ粋ノ風情
ヲ添ヘ赤裸（アカハダカ）ニ置ヒ集ハナト俚語ノ中ノ風雅ニ入所見ニ足アリ
トモ云ヘキナリ然ニテハ都曲ハ盡玄ノ法ニシテ田舎曲ハ碑裨ノ
格ナランキ半句ハ五七言ナト從筆ニ七五ノ拍子ヲ知ルヘシ

東曲（アヅマブリ）　生卿坊

かきやきびやらでさしかりもちふて命ぬめの二億き
ちんぞろか

但云此曲ハ奥ノ田植ニテ歌ヘフトハ配符ヲ云イチニハアトハ不時ヲ云ニ總テ
皆踏皮（タビ）ノ栄耀ハ免モアレニ倭ノ年貢ヲ気毒トナリ但シ生仏ハ
東国ノ座頭ニテ此類ノ樂府ヲ謡ヘリト徒然（ツレヅレ）ノ為辨抄ニ此ニ見ヘアリ

羅子曲　東ゐ坊

さくらちれぬ秋のんをてまちきてゆくくぬの山の山様も
人まかりれて小袖きそ今まな郷へかつぬぎておとの閣の
紅葉小川宿ことねでうへの花ならまた日和つく小ほとも皇の端

やむなくしまつぬひのなくしまりあつまりいはのゆや
ものかんおもひなくへとくすれるのね猿よようつつても
猿みめりれをまつさるやせとあふさるれ猿の神それと
かすまやせとものへうし猿もすきやねりまとすまてもお
山もりよもいをおや猿のそらしまふりとみえこうけ
桃李のいものちくも秋かるりの雪柿まゆらしまれるの
色まさく世とあらし猿のなよれひしほかりき
猿はまなうしかん三山四河といひものあるつたや
およひなれらの月とまひてあふとかえのあれうらよ
君と老猿のまうとゑやらん

此云歌曲ハ此体ニシテ一首毎五十八句ナリ其ルハ行事ヲナシ四十賀ヲ著ノ娘ヲ舞子ト云フ者ニヤシワキ主テ大名公家ノ宴ニ召テ待ツニ如何ニ定ナキ世ノ無常ナラズヤト斯ク且ツ子ノアヅナルヲ云フニ似テ實ハ其ノ親ノ情ナク及ハ又其ノ月ヲ数ムニ多クハ鏡ノ前ニ泣テ宴ハアヤシキ尼トモ成ナシ去ルハ前ノ舞子ナラヌニ今ハ都ノ歴々モ娘子ヲ其業ニ仕立ルニ何某ガ娘ハ其ノ師ヲ取リテナト指御モ花ヤカニ舞扇ヲ勝ニサヽセタル京師ノ時世粧ヲ嘆息セルナリ去レハ舟コギ日和見ルナト笑キテ狄ニ道行ノ様モ綱手ニ渡リクラ一テトハ路々猿ノ所作ナルヲ舞子ノ名ニ喩ヘタルナリ或ハ袖ニ世ヲ忍ヘトハ如何ナル貧家ニモエエ帰テ父母ヲ

孝養シ世ヲ靍ニ過キヨトナリ或ハ述懐モ聞スヤトハ一ハ帰命ノ
短語ニシテ君見スヤ君聞スヤノ例ニ古樂府ノ常語ナリ然ルニ
我子ヲタキテハ俵抱子ヲ帰ル青峰ハ後ニ下云ル古詩ノ意ヲ
聞スヤト舜子ノアドキキヲ諌メシナリ但シ世ヲ忍ハ以下ハ空ニ
拘子ノ向ヲ挫キテ例ニ変吉ルノ曲ト見ルヘシ況ヤ桃李ニ栗柿ヲ
對シテ佳肴ノ危キニ居ラシヨリ疎菜ノ安キニ眠ラシニハト先覚
ノ詞ヲ取合セテ朝ニ暮ニ四ノ世ノ様ヲ云ヘル此篇ハ和哥ノ文章
ヲ傳ヘテ世ノ学ニ路ニ教誡ヲ忘レサル誠ニ天地ノ情ヲ動シ誠ニ
鬼神ヲモ泣シムヘシ

本朝文鑑第三

引類
富士引　手習引

諺類
雨乞諺　石搗諺

辞類
風俗辞　山姥辞　艶詞　戯作辞
情子辞　夕暮辞　鳥追辞

箴類
閑居箴　猫恋箴

引類

冨士引　并序　山部赤人

あめつちのわかれしはしめ神さひてたかくかしこき駿河なる
ふしのたかねをあまのはらふりさけみれはわたる日の
かけもかくろひてる月のひかりもみえす白雲もいゆきはゝかり
時しくそ雪はふりけるかたりつきいひつきゆかむ
ふしのたかねは

田子の浦ようちいてゝみれはましろにそ
ふしのたかねに雪はふりける

杜云引ハ諸物ニ分明ナラズ玄ト詩騒ニ似タル物ヲ序引ト并ヘテ註シタルハ引ハ決シテ詩賦ヲ後ニスト云ヘル題詠ノ今ノ文ノ意ナラン此故ニ詩人玉屑ニモ始末ヲ載ルヲ引ト云テ彼ハ詩引ト并ヘ註セリ然レハ万葉ノ題名ニモ山部赤人望不尽山歌一首并短哥トアル時ハ前ヲ体トシ後ヲ用トセリ去レハ長短ノ違ヒアリトテ同シ哥ヲ二首ツラネテ并ハ歌トハ如何ナラン強テハ長短ノ哥二首トハ云ヘシ定テハ長哥ヲ引トシテ短哥ヲ後ニナセル時ハ誠ニ本朝ニモ引類アリテ足ヲ古今ノ文鑑トナサハ選者ニ一部ノ眼力アリト称スヘシ況ヤ結文ノ詞ヲ見ルニ云イツキ行ン冨士ノ山ハト次ノ短哥ニ云イ出テタル不思議ニ序引ノ両格ヲ兼テ和漢冥合ノ引ト云ヘシ

[illegible]引

年若日　東以居

父をなさしあふ瞬草の二葉よりまた風雅をさとし
おのくちゆかしみそのつまも枯てそのなをさしゆかしの歌
ふくなりてそれ子をいはらぬ俳諧ちとし京の南同し
もねらさしそのめの蘭なりん性ふちくもよあそふも
なりもやみをうなをしけふに此蘭の名をあらく二葉
宮川家のおもいはやなよ二葉ふのみをいそのん
俳つえて咲ぞうる蘭の子ちいぬ

但云此引ハ名ノ説ナリヤラ語路ニ長短ノ拍子アレハ柱ヤ枕竹枝

引ニモ似タラン是ヲモ俳文ニ引ノ体トヱフヘシ然レハ筆ノ上ニ多
以テ始ハ其父ノ遺名ヲ称シ中比ハ其子ノ教訓ヲ加ヘ終ニハ
祝詞ヲ用イタル誠ニ序詞ノ短篇ニシテ一篇ノ情ヲ尽セリト云
ヘシ増シテ花鳥ニ詣ヲ寄セテ引ニハ文法ノ風流ヨリ筆都
ヲモテナスニ虚実アリ或ハ其句ニ俳トハ蘭ニハ藤俵ノ様
アリテ其父ノ行儀ヲ云ヘルナラン但シ此蘭ハ木以下ノ子ニシテ
其比ハ廿年ナリトヲ越ノ高田ニ産ス瞬草ハ父ノ俳名ナリ

謡類

雨乞ノ謡

盤珪和尚

うれしさてさやさとさなへさへ炎くちあふさに封さく

むかしいまゝしへとこちなしなかゝかへ秋ころ

仁云此謡ハ播ノ人ノ甚ク唇傳ヘテ雨乞躍ノ唱歌ナリト云ルハ其ハ世ノ国民ニテ此和尚ノ道性ヲ慕ヒテ雨乞ノ奇特ヲ願ヒタランニ心外無法ノ禅話ヲモ示サズ此等ノ俚語ヲ童部ニ教ヘ給ヘル誠ニ狂言綺語ナガラモ仏乗ノ縁ヲ結ブヘクハ天モナトヤ納受ナカラン其一ハ本来ノ面目ニシテ其二ハ例ノ不生ナリト其家ノ人ハ按排スヘケレト實ハ躍ノ笠ニ幣帋附テ遊戯自在ノ法ト見テ深ク信シ高ク仰クヘシ但シ始ニハ播ノ龍門ニ住シ後ニハ天下ニ擅行シテ仏法東漸ノ禅師トハ云ヘリ

石搗謡 并序　　坊之仁峯

むかし伏羲神農の御時よりふとく柳をふきは（ふくれ）よそ枝を役にとゞめのまへにあらく砕かれたとえ菅原そして大工の作る木を鉋一丁まで掘りよりけりのち農業の代はよりもひとくを石をむすびて庭のやりならにふとよせて田舎の諸事ととくしりける殿閣大舎の世々と見て人のんそふやうに有られ咸陽宮は美と臥くられし處さりのぼれは阿房やおとき全盛を積も一国の臥をもくしよりせちまでみればなほて

世にまじはる人の心からあるやうは家の生業として其身の人
あるてれの其の大事ならぬものはのは詠ようにさへ今の
時の小童などまでも梅も桜も風雅とよばれて世にもてはやさるゝの
経の為なりとはいへども画のうつりよからん覧らく貴のあるは
柚るりとて卯月の十日ころあけんよりうくるゝまでの
ころと鑿彫（ノミコリ）の音も乏しなくあるまゝにたゆるゝの住居
られしく今はハ又鳴の旅やかさにおもふのみをそ
いさみ侍り

石ばしる画のふかきにそくはれ辞もふたつふ
来も分れふりね鶯も旅なる宿なりけり

評云此謡ハ一章七句ニシテ或ハ古楽府ノ体トモ云ベシ去レハ
其序ハ虚誕ナカラ戯世ノ要領ヲ云ヘナセル文雅ニシテ且ツ
可笑シ況ヤ其謡モ俚語ナカラ花ノ二字ニ風雅ヲ添ヘタル
此篇ヲ和謡ノ文鑑トハ見ルヘシ但シ此篇ノ数ハ加賀ノ金城ニ而
度ノ田禄アリテ牧童北枝ガ風雅ヲ残セル其句ハ其世ニ
吟行セリトソ或ハ題下ノ拾主仁平ハ例ニ我師ノ記名ナリ

辞類

風俗辞 并序　　渡部狂

あのふらりて陰しをはふんなり俳師と林廷辞とよむに
ほとゝぎすなんおもなく此二字の三字あれなしはをとして所始

の音律と定りておもくかろくいひて相かなひて宮の音韻
にも通ずるなり漢文の辞類には武帝の秋風と始と
いひて六韻一叶のあやをいひ中なる詩となりて騒たるあり
騒賦して辞とよばるゝ騒の賦はもろこしの辞の賦
はあらんねはらん師の定るありし格として一をいひ賦
あるまて情をいひし一へちかし浮大卿のちかひあるん二字は
賦して一の格あるは五七の法もあるまて叶韻の式し
ならかりてきはまくちなりの風情をうたれたいはしやかるなる
伊勢れは本のし漢の帝れ秋風に辞ありて旋を洞へ
訳して格を漢何の格として法てあふくまかくと訳して權述辞

また紀氏にもかの船よりさゆふ辞注のあはれひて權述辞の
辞の文字とおほせたるなるへし法はやく文章の彩色をそむるの
よしの訓解あれとも辞類をうつして其の旅と法して
つかれの文字訓の法をなしつたるは説文よく權述辞をとりて
此二字は詞なりしうるは辞とうるつまり徴情とさへたるや
或は言句のかなりとしつるを或は古文辭式又辞は情深して
語辞しは緩の文字とそうはへてや又章のかれ正は語
とつふへくとして法格のかの風雅とさかれともなかんはして其意
の名法つものかなひて辞の文字に訓もまつらなはまや秘訳の辞
なるは土佐日記なし伊勢物語の詞法なるひてなし一にて文は古書

の謡非なくし雅和言のやうやかにも俗にもあらん
ためあるにまかせてしるす所なし詩賦等作りなれ
わらしみ給ふ人はかれと本朝の作をくはへてかきたる
の辞をとりあつめたる人の国の註を見とも知らればかりの
文君のことをもつねにかはるふうふの道あらんは
諸卿の和詞とせり猶へてまてにむかしの中古より
も繁盛詞の二格あれば実も同様辞二三章にくはて
これらの風雅なるんやとしはのとうよを作られては辞をそ
ならし作り遠く之手前世の詞をまつねそ近く
は余遠波の辞をもちんまさ

傾城詞

こゝろにもらぬことなれゆへにやうえ人なきことのまゝに
かりもかつされくものにしてあてちんきとめてゆきたへ
うきふし作らさもうまくの金非誹も作ふとも

馬士詞

放をてあゝしく作庫くてもの向のまゝよ道をあれ
と帝うきてゝ書北帰うしにより川のおかれ
ひなたをされてやとくし向うれもなりらしいをなくい

扨云此一冊ハ辞類ノ註解トシルヘシ然ルニ楚辞ト云附ハ
楚国ノ人ノ詞音ヲ字トセル辞言ハ関東ニハヘイト云ヘイコヘヌト
云ク都ニハサンセ氏アンス氏助語ハ国々ノ風俗ナリ其レハ叶律
モ叶辞モ句読ノ長短ヲ調ヘカルハ詩賦書ニ行ハシナラス
此七題ノ外ニ叶格ヲモ立テ善ク文類ヲ編ヲカトナリ
其レハ須城ノ詞ニハワレモコレモ彼カ手詞ナカラ杖ヲ乞ルト云イカラ
戯言ニカルト云ヘル御ニ風雅ノ忘レサルナリ次ニ馬士ノ詞ニハ銭実
名ヲ彼カ風俗ニシテナ文ヲ著ト云イニナラ関ト云ヘル竹ノ
一字ハ御ノ風雅ナリ或ハホコレモ益アイ其文トハサハミナラヌト
云フ其ヲホツトツメ名ハ助語ニノ些ニ一字モ土返ノ腹モ宜ニ知ルヘシ

山姥ノ辞

一休和尚

抑も山姥は生所もしらす宿もなしたゝ雲水をたよりにて
さまよひてはいたらぬ山の奥もなし然れは人間にあらすして
して命をつなき世にすむとかへらぬ自性と変化して
一念化生の鬼女となつて目のまへにあらはれて邪正一如
とみる時は色即是空そのまゝに仏法あれは世法
あり煩悩あれは菩提あり仏あれは衆生あり衆生
あれは山姥もあり柳はみとりはなはくれなゐのいろいろ
さて人間にあそふ事ある時は山賤の樵路にかよひなれ

うけやさむろる是に同とうし月かゆかしに山を見て
星までなかる時もあり又ある時は織姫のひとこともしある
窓に入て松のうちと見て見える紡績のかたくろ
ときさ人とさそそろいきとものし賤の月よりてんし
とやんのそふらん世をとう川舞のかうけるきしてえ
垂雲をおそきの月に埋れうちをきぬ人のきてしま
るもの子所の方あり此媛に南北まそう川にまうて山焼の
けさきすれや私にかふりて世わりにせさ翁孫へとせん
は為ゆもこすも韓らの所うちにあれは河しまうあし戒の
山焼ら山もえそりまうるろうしき

註云此註ハ世ニ知ヒル諷ナヤラ例ニ我師ノ論ニ従セテ実ニ辞ノ
一字ヲ加フ去ヒト而審ノ諷ヲ指シテ辞類ト云ニアラス諷ノ
中ニハ此類アリトスナラシ去ヒハ山焼ノ一冊ハ一休和尚作トカヤ
世ニ善ク云イ傳ヘテ古今ニ希有ノ文法ナリト誠ニ忽然
念起ヨリ諸法皆空ノ道ヲ示シ魔佛一如ノ理ヲ露シ
テ柳ハミトリ花ハ紅ト同前ノ境ヲ云ナ尽シタルニ色ト云
字ハ結前生後ノ働キアリテ柳ハ緑花ハ紅ト文ヲ鎖ス仏理
ニ通セスシハ一体ニアルニシク文字ニ達セスシハ一体ニアラサラン
況ヤ花ニ体シ月ニ埋ヒト文章ノ手返間ニ鼓舞ヲ合セル度
モ倶テ感スヘキ段ナリ但シ諷ヲ辞ト云ハ語路ノ長短ニ知ルヘキナリ

艶詞

紫式部

姫君例のわるくてうち結ひつゝ婦もえけしてうけ
少しおつまれいてとらくくていくのいとよそてく
こほれかるしそうとわきてそおあるおちて
くやあるとめてまへふうあつよのふ称も一日もえそそ
まろらぬへいとくるしうみをはれしおそとおかしそう
おもちんやきくろひけてまつそれくしくうちある
人のんやかしとそひてあやしかれきろくもはらく
陪おとるしくえ有てん御へてはてよりかし人のうちと

おつけなきふるまひ世にけなふありてそふる御よくえぬまへん
とそふそ有しこよしとかくりけれ給へ、いとそくお倫
くてそもかくいらへけれ給ひてやそは膝によりて
て粧ひ給ひあれんいとんくるしうて今そもおへかるそ
ありわさとみえかへ皆ききらてありの有しとそけさき
まうてもそう

狂云此段ハ源氏紅葉賀ノ詞ナルヲ寔ニ此類ヲ加ル文
ハ藤隆房ノ艶詞ノ二字ヲ借レリ去レハ源氏物語ヲ
和朝ノ文章ノ鑑トナセルハ筆ニ縦横ノ神アリテ人情
ヲ尽スニ委曲ナラスト云ヿ又ナシ増シテ此段ハ紫上ノ源氏ニ
思ハレ給ヘル六十帖ノ中ノ骨節ナラン然レハ幼キ人ニ対シ

テ余所ノ恨ヲ負フニシクハ永ク世ニ在リナ添ハンドハ必ナヲ
スカセル詞ニモアラズ好色深妙ノ本情ナルニ白露玉ヲトハ
サ心ナランニ玉ト毛モ角モイフ又玉ハスト云所ニ枕ヲ結ト
深キトノ浅深ヲモ知ルベキナリ誠ニ其名ノ勝枕ハ盤石
ヲ以テ押スガ如ク深キモ立ガ子結ベルハ業力不思議ノ
艶詞ニシテ此句ニ甚深ノ情ヲ汲ムベシ

戯レ仇ニ絆

烏丸光廣

善ニ福ちれ法な等も一礫子もうて南浮檀金
の鋳像なり多田新発意濡仲のお仰とも

[illegible]
卿も十部仏あるは元買人をと[illegible]
[illegible]
極楽悪人よく[illegible]法躰[illegible]
[illegible]有馬山の夕霧[illegible]
来迎[illegible]
駆草[illegible]山から[illegible]
[illegible]胡桃[illegible]
[illegible]結縁の[illegible]往生
[illegible]

狂云此篇ハ光廣卿ノ有馬ニ入湯ノ時ノ筆也トテ書ル行次ニ書傳ヘテ見タル人ノ説モ有ルニヤ然ルニ此篇ノ題目ハ結文ニ綺語ノ二字ヲ見テ此二字ヲ以テ題セシカ中間ノ一首ヲ辭ト見レハ左モ古文ノ通文ノ辭ニ似テ前後ニ序詞ノ文勢アレハ此篇ハ漢家ノ辭トモ云ハン但シ此卿ハ和哥ノ家ナカラ此筆ノ字格モ遊セ玉ヘル誠ニ文法ノ誅カヽリ虚實ノ自在トハ称スヘシ

憐捨子ガ辭

芭蕉庵

駿河の國ふし川のほとりを行に三ツ計なる捨子のあはれ気に泣あり いさや此川の早瀬にかけて浮世の波をしのくにたへす露はかりの命待まと捨置けむ小萩かもとの秋風こよひやちるらんあすやしほれんと袂より喰物なけて通るに

猿を聞人捨子に秋の風いかに

いかにそや汝ちゝに悪まれたるか母にうとまれたるか父は汝を悪むにあらし母は汝をうとむにあらし唯これ天にして汝か性のつたなきをなけよ

狂云此辭モ通文ノ文勢ナカラ捨子ニ秋ノ風イカニト向ヒカケテ如何ニソヤト序詞ニウケタル但シ辭ノ韻ノ一体ナリ

俳文ニ辞ヲ立ル時ハ千般ノ法格アルへし誠や富士川ノ瀬ヲさし
浮世ノ波ニテイヤケタル此川ナラテハ更ニ知ル人しかニ秋ノ露
ハ源氏ノ哥ヲ借リ父母ノ情愛ハ荘子ア天性ヲ云ヘル例ニ
和漢ノ博達ニシテ是ヲモ漢家ノ辞ヨリ俳文ノ助語ノ例得タリトスヘし

夕暮ノ辞　子珊

東花坊

むかし翁ある湖南の人と達ねて武江の深川の
草庵をおとづれしが是も東に帰りて人ありて別をおくるに
はなれんや泣にその人を此人に似てその哀をも称卿
ありふれたるむかしより送りにむかしなる庵住して翁
て詞とりて送る人とまうらひ賤とりて送る人とやむ
その哀をいひて余所なる人なるや何しその間の夢まよ
ふあるて賤をあるくのあるものはなれて有とはなし
より旅にあるなる人に一銭の價とるやうして上方の旅人
妻子をかへりみ官禄の人は家名をおもひて世に
ありて所の旅にあるかんあるはそれぞれにあるはいはまう
のし春秋をしたへもてむかへ其志ると武士の旅に
引けるはたゞ今かけり是むげにしぬる事にすめ
かくして伊勢の令もかまへおもひをもつれ〜とまち
皆旅にして旅をとられさる人をを宗に栖原阁のあるは

おほやけの事にあづかりて武陵一万里の旅にもおもむきら
その筆をいるれはよそにひさしからんにもあらしまほしうも
あるまじくはけふのなみだそこに秋よそ起の月と見え
るゝ二子里のかれ此旅人の心もかの三笠山の月にひかれなん
まして都路の関を越かれは旅人なりけんやのんなりけれ
此人をわけて梅の下よとわけて東花坊か門人をこれとよふ
又そこは支梅の説かよりて梅のむかしのよきをそてつまもや
王梅の江南より道にたくふ風雅よ酸の味をまうりて
馬祖老倒の器量をもつて門へいさとしけふのうふ
として此年訪るゝやうなりんと梅源閣上よ再と

あけてまちし此夕暮をおもひむかへ
鴫立沢やその夕くれの詩人を世とともにかゝる此名残とも。
たれもたゝのこてある人のなりゆきあゆてかた。
趣のうらて此駒をへし此ゆふ暮をとゞまれやはせ。

狂云此辞ハ十三句アリテ鴫立ノ一句ハ発語ナレハ十二句ニシテ
六韻ナルヘキニ是ハ二句合セテ一句ノ意ナル故ニ上八句ニシテ二韻
ナリ是ヲモ叶韻ノ一格ト見ルヘシ去レハ其詞ハ老子ノ詞ヨリ
中比ハ毛詩ノ三秋ヲ摘シテ和ニ仲磨カ吾ヲ寄セ渓ニ入
王維カ詩ヲ合ハス梅子ハ傳灯ノ故支ニシテ師才ノ伊ノ称名
ニヤ摠テハ西行ノ東下リ六アラテ定家卿ノ白屋ノ作

シサラミニル本ヨリ三タ一暮ノ詞ヲ含メテ價格ノ賞冨ヲ旅ス
ニ題ハセル誠ニ文章ノ壽法ト称ス一レ然レハ此字偏ノ辞ニ從ヘリ
漢文武ヲ守リテ別ニ傳文ノ一体ヲ立タル法ニ私ナキ證文
ナランシ但シ此序ニ湖東ノ人ト八五老井ノ許ヘニシテ其時ノ交筆ナリ
ノ辞ト題シテ彼カ文選ノ巻頭ニ置キヌ去レト辞ト題セシハ別ニ
兼括モアランカト此辞ニ消テ論アレハ爰ニ此字偏ヲ出セルナリ

鳥追辞

作者不知

やんらそれやよ町や下町のとり追ひまつりて神の社
といふのこゝろ殿もおさへひの村りおさへひのたはらにおさへ
法蔵寺の法印にきこえしは衛やら左大将に右大将関白
殿下まであれはかゝるとりのとり追ひ給ひ御代のふたまで石や
江へ西田も田よ町と當も町あり宮ゝ八よ町々御帰ある
中の牧のよきさとと壽年あり御代の御代おとおやおさめそ
おくゝ田をされ／＼かゝうゝまた河こまとまゝ子に伝来ま
稲子まうらね町のまよとよ来つもとかね町のまよと
一万来りつと麻毛あり駒に作りやをしけて雄羽も
走りゝら雄羽もまりゝまうゝのとまゝたありて踊
ゝりまありて踊ゝり毎年の稲ひさを袷以稲と前はとぞ
田螺のゝまりきゝゝまゝよくりて馬子とけりやりつゝ

雨ふる夜ふけてそのあれ田の作おのかこさきりつゝまゝう
雨ふるよりの稲もよきのちよりふたよおもたとゆうふて
先より西に夕日をとゆうふてる追とゆふさて一年ならく
かきへてもそれハ十月(トツキ)山より二月(タ)所左の月と九月といふ
て正月の月ともそ師月と秋ふさ（中略）ひまうて名にし小女郎
うちはらめくやしおも伊氏のゆろとさ花のちいかめ

往云此章ハ正月ノ祝詞ニシテ鳥追ト云者ノ農民門々ヲ云イアリク唱哥ナリ其者ハ旨シ説経者ト云テ逢坂ニ蝉丸ノ流ヲ汲テ三井ノ近松院ヲ本寺トセリト今徒羅トモ云ナリトシン然ルニ此篇ノ方明ナラス卑凡ノ者ノ習ヒ俘ニテ

鳥追哥ノ語ニハアラテ世ニ云フ武藏坊弁慶ヲシテボベント句讀セル如ク口授ノ違イ多ヲヲノ書シト此等ノ文章ヲ云思九向シテ定ムヘキニモ非ス不ゝニ其ハ文ヲ中略シテ法格ノ外ノ風雅ヲ知ヒトナリ去ルハ五七ノ語路モナク假名鼻名ノ配モナク二句長短ノ拍子モナキニ絶ニ風雅ノ情ヲ見ヘテ此等ヲ辞ノ文鑑トセハ文章ノ家ノ活計ナランカリ去氏此式ノ林第二庭ニモアレハニヤ聽聞所ノ御沙汰ニ及ヒ中牧ハ井田ノ法ヲ云ヘル但シハ延喜上ノ淳朴ニシテ上古ノ作文トハ見ヘタリ然ルヲ結語ノ妊婦ヨリ不意ニ作法ノ二字ヲ云ヘル妊婦ハ門々ノ祝詞ニシテ作法ハ彼ノ常語ナリト見ルヘシ

箴類

閑居箴　芭蕉庵

あらものぐさの翁や日比は人のとひ来るもうるさく人にもまみえじ人をもまねかじとあまたゝびこゝろにちかふ事なれど月の夜雪のあしたのみ友のしたはるゝもわりなしや物をもいはずひとり酒のみて心にとひ心にかたる庵の戸おしあけて雪をながめ又は盃をとりて筆をそめ筆を捨つあら物ぐるをしの翁や

酒のめばいとゞ寝られぬ夜の雪

任云此題ハ大学ノ辞ヲ借テ閑ハ閑居ナリ小人ノ独処ナリト先師ガ註ニモ云ヘリトゾ去レハ此箴冊ハ隠者ノ常情ニシテ或時ハ世ヲ疎ミ或ハ人ヲ懐シム本ヨリ心神不定ナレハ頓阿モ風月ノ情ニ過タリト兼好法師ノ箴文ル作ナレ誠ニ此箴冊ハ前後ニ翁ノ字ヲ用イテ自己ノ散乱ヲ箴ル名首尾ノ文法ヲ〆ルヘキナリ但シ此句ハ切字ノ発句トモ云フ（キヤト故ニ羽モ語リ玉ヘリトゾ常ニ戯作ノ比ト古人ヲ云ヘリ

猫恋箴　去巴静

猫よしなしとむかしも女三の宮は懐をはなたせ給はぬ桂の紐もことの始とはなりて今寡婦のくさまくらあらかじめ……

尾張の膝にあまえむつましきにおのか猫といひかけてみれは
きのふまてはなれさりしわかれのかなしさを[illegible]
ころもへんけうにくはしかねて今さらいつはり
うられゆかむ鼠にも野等猫のうきみをさすらへ
けてこれも今やの経を掛てさきもあそのは毒ばかり
の色よるは猫ほかの山のおくをおもひてしよろしき敵て
さへいひそこて世にいつはりし又とふみやしあはれ
けふこそあはれおもふきの身をかりて用捨わきまへ
又猫鼠わすれてはやしき渡猫とありて年ころの
姥の女をたのみにまかせて身のうれしの

りことかくみなれしもてなしもありなから有情の色さへやさしくつる猫は
一おもてみひやうえへく人を二世まてもかゝらんに
いはく人とりそ猫さくにはほんと給そ深き望
むかしに源氏のあやしきよんものすき給へる御達
そつしむさきたよしあやふしとさえそうれくら
かわんらに

評云此識ハ自利利他ニシテ詞ヲ寄スル二漂稚ナリ志
ハ源氏ノ風流ヨリ枕草紙ノ富言ヲ合セ或ハ徒然草ノ
古語ヲ借テ猫岳ノ山ノ古ニ寄ヲ採ル狐ト猫トノ三ツ入リ
ヲ云イテ又ト云字ノ徒名ヲ童子タル文筆ノ自在ハ
此内ニ見ルヘシ然ルヲ孔子ノ語ヨリ人ノ色欲ノ猫ヨリ

モ浅間敷ハ遠ク蔵テ近ク慎サランヤ然レハ色ニハ遊ヘクテ
色ニ溺ルヘカラストハ関雎ノ意モ此事ナルヘシ但シ臣静ハ太田
氏ニシテ尾ノ城下ニ假居ス秦生ハ濃ノ竹ヶ鼻ノ産ナリ
トウ